「たそがれの領域へ」―私の研究と教育活動

外国語学部 スペイン語学科　Morales Rama Alejandro モラレス ラマ アレハンドロ

２０２１年の春から神奈川大学に着任したモラレス・ラマ・アレハンドロです。私の専門は日本文学と比較文学です。文学の研究には様々なアプローチがありますが、私は文学を研究するうえで一番大事なことは人間性について学ぶことだと考えています。そのために、幻想文学と社会問題の差別の関係について研究しています。最初に超自然に興味をもったのはギリシャ神話を初めて読んだ時でした。無宗教の家庭に生まれた私は小学校の頃に観た「聖闘士星矢」というアニメをきっかけにギリシャ神話について関心を持ち、それから様々な神話の本を読むようになりました。初めて読んだ幻想文学作品はミヒャエル・エンデの『はてしない物語』で、何回も読み返しました。ちょうど当時通っていた小学校の近隣にロマの居住区があったことから差別問題に対する認識も持ち合わせていました。

大学進学時にマドリード自治大学人文学部英語文献学科を選び、そこで英語と英文学を学びました。メアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』との出会いを機に、更にロマン主義やゴシック・ホラーのような幻想文学に興味を持つようになりました。英語文献学科の2年生から少しずつ日本語の勉強を始めました。日本語の授業では、早い段階から日本文学をスペイン語訳で読みました。そのため、私にとっては日本語と日本文学は最初からつながっていました。4年生の時に黒澤明の『蜘蛛巣城』という映画とシェイクスピアの『マクベス』を比較研究したことを機に日本学を勉強することを決めました。マドリード自治大学人文学部日本学専攻に入学して日本文化を様々な側面から勉強して、日本の大学に短期留学をしようと決めました。２００６年に上智大学で出会ったユー・アンジェラ先生の指導により、明治時代に生まれた作家の泉鏡花の『高野聖』を読む機会を得たことで、日本幻想文学を自分の専門領域にしました。

２００９年に再び来日して、上智大学大学院のグローバル・スタディーズ研究科グローバル社会専攻博士前期課程（比較日本研究学）に入学し、日本文学・日本宗教・美術などについて研究しました。修士論文では泉鏡花の幻想文学と差別問題について論じました。このテーマについては、このあと詳しく扱います。上智大学大学院文学研究科文化交渉学専攻博士後期課程に入学してからは、泉鏡花の作品の研究に集中し、鏡花について論文を書いたり国際的な講演会で発表したりしました。そしてその間、幸いにもイェール大学での短期留学の機会もいただき、新たな視点から泉鏡花の作品を分析することできました。このような経験により研究者として成長することができたのだと感じています。

自分の研究では、作品（メタファーのような修辞技法の使用方法など）、作者（執筆活動の過程と社会的なテーマに関する随筆の考察）、そしてその作品が書かれた当時の社会、この3つの要素の交差する点について探究してきました。このような観点から泉鏡花の様々な作品を分析し、慣例では社会批判と関連づけられることのない幻想文学というジャンルおよび泉鏡花の作品の批判的な側面を探ってきました。

泉鏡花と差別の研究で、私は鏡花が『たそがれの味』という随筆で展開した「たそがれ」の概念をテーマにしました。その随筆の中で、鏡花は「たそがれ」を時間帯としての夕暮れとは異なる「光」と「暗闇」の間に存在している世界として創造しました。いくつかの作品の分析によって、被差別の登場人物の居住している場所は境界でもあり差別的な空間でもあるということを見出すことができました。また、被差別の登場人物とその空間の間には密接な関係があって、彼らはその差別的で境界のような空間に居住しているからこそ、日常生活の規範から逸脱した、つまり境界の状態におかれた不確定

な登場人物であるのだということも明らかにすることができました。そして、この状態がその時代にあった被差別の人々（たとえば被差別部落や抑圧されている女性）に対する偏見を不安定なものにさせているのではないかと結論づけました。現在は、ポスト・フロイト派の心理学・哲学の理論を援用して、「たそがれ」の概念が作品の構造にどのような影響をあたえているのかを研究しています。その「たそがれ」の物語の構造こそがその当時の特に被差別の人々をめぐる思想や彼らが受けてきた不当な扱いを明らかしているといえるからです。今後は、そのプロジェクトに加えて、日本文学とスペイン語圏（特にラテンアメリカ）の文学の比較研究を行い、それらが互いに与え合う影響、またそれぞれの国における社会問題と幻想文学の関係性についても論じたいと思います。

私はこれまで教育者と翻訳者として活動を送ってきました。研究にもつながる翻訳活動においては泉鏡花の作品をスペイン語圏の読者に紹介したいという想いから、翻訳のスキルを磨いてSatori Ediciones出版社で泉鏡花の短編集の訳本を一冊（序文を含めて）出版しました。また、幻想文学・ロマン主義への関心から研究者の友人とともに佐藤春夫の短編集の訳本も一冊出版しました。

最後に教育活動についてお話します。スペインでは英語を教えたり、銀行の英語圏向けのカスタマーサービスに従事したりしました。その経験を経て教育に関わる仕事に従事しようと決めました。来日してからは、大学院生の生活を送りながら大学で教える準備するために上智大学のライティングセンターにて英語で作文を書く学生をサポートしたり、日本文学の教員のティーチング・アシスタントを務めたりしました。この経験を通じて、日本の大学生が困難であると感じることに対応する方法や教授に必要なスキルを身につけました。2012年から東京のスペイン語学校でスペイン語を教え始めて、以前に学んだ言語の教え方を自分の母語教育に用いてみました。それから立命館アジア太平洋大学・上智大学・神田外語大学、そして神奈川大学でスペイン語とスペイン文化を教えることに従事してきました。私の教育方針は多様性に対応できる教育です。様々な環境や異なるニーズを持った学生に配慮したカリキュラムや授業方法を実践していきたいと思っています。多文化の習慣や抑圧されているマイノリティ（性的・宗教・人種）の存在を言語・文化の授業に重要なテーマとして取り入れ、それを教えることを通じて、学生には他の文化と自分の文化の人々とのEmpathy（共感）そしてCritical thinking（批判的思想）を学んでほしいと思っています。